
邪気眼女の華麗なる日常

クロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

邪気眼女の華麗なる日常

【Nコード】

N2402K

【作者名】

クロ

【あらすじ】

中二病とは、自らを『選ばれた者』などといった、特別な存在と思い込み、現実と混同し何かと闘う戦士（患者）達である。

この物語は、そんな戦士（患者）の少女とその少女を幼馴染みに持つ少年の戦いの日常（主に少年の）をえがいた物である。

初投稿で拙い文章ですが、できる限り頑張りますので、読んで頂けると嬉しいです。

平凡な非日常（前書き）

文章力は無いですが、
これから頑張っていこうと思います。
よろしく願います

平凡な非日常

俺は歩いていた。

どうしてって？

そりゃ人間普通は歩くだろう？

どこにだって？

日本に生きる普通の一高校生である俺の行き先なんて、休日でも無い限り学校に決まってる。

そんな普通ばかりの俺でも今日ばかりは、少し事情が違う。

先程高校生だと言ったが、正確に言うならまだ高校生ではない。なぜなら、高校に通うのは今日が初めて。

つまり今日は入学式であって、それを終えた後に、俺は晴れて高校生って訳だ。

平凡な俺にとっては珍しい、普通じゃない1日ではあったのだが。

どうも神様は俺が嫌いらしい。

「おい、その『黒き者』」

ただでさえ普通じゃない1日だったのに、オマケとばかりに非日常（いや、日常って言えば日常なんだか）を投下しやがった。

非日常な日常（前書き）

これでプロローグが終わります

非日常な日常

「その『黒き者』、待て」

はあ、背後から聞こえてきた、聞き慣れた声にため息を吐きながら、しかし振り返らずに答える。

「誰が『黒き者』だったの、黒崎だ黒崎、いい加減中二病も卒業しやがれ、お前も今日から高校生だろうが」

「中二病などといった不名誉な者ではない、私は選ばれし者『華京院・F・クロウディア』だ」

「黙れ、本名『奥谷 三咲』別に地味な名前でもないんだしいーじやねーか」

まあ特徴ある名前でもないから、偽名と比べた後凄く微妙な気分になるけど。

「まったく、お前も少しは成長しろよな、そんなだからお前は……」
そこで振り向いて、俺は言葉を失った。
なぜならそこに居たのは、

「ん、どうした？」

幼馴染みであって、

「どうした？じゃねーだろ、なんだその格好は！？」
女性であるはずのそいつは、

「なんだって、制服だ」

学ランを着て立っていた……

「……………」

「……………」

「なあ、三咲」

「三咲ではない、華京いん」

「黙れ！！ 制服と言うがそもそもお前は女子で着る制服ブレザーであって、さらにうちは男子も制服はブレザーだ！
よってお前は何故そんな物を着ている！？」

「理由など一つだ」

「なんだ？」

「知れた事、何故ならこの方が格好いいからだッ！！」

馬鹿が居た。

恐らくその馬鹿には『コイツの制服姿可愛いんだろうなあ』とか少しでも考えていた俺も含まれていただろう。

しかし言い訳をさせて頂きたい、我が幼馴染みである奥谷三咲は、悔しいがかなりの美少女だ。

肌は透き通るように白く（部屋から出ないから）顔も整っている、そしてなんといても後ろで一つに纏めている、ほぼ金髪用のキレイな髪だ

普段から邪気眼丸出しなせいで染めていると思われがちだが、彼女のそれは地毛である。

もともと茶髪だった髪が、色素が薄くなり中二ぐらいには金髪といっても差し支え無いほどになっていた。

ってそうじゃなくて！

「馬鹿な事言っでないで早く着替えて来い！入学式にそんな格好で出るとかいうなよ？」

「しかし、貴公が呆けている間にそんな時間はなくなったぞ？」

「貴公とか言うな痛いッ！っじゃねえ！！もうそんな時間かよ！クソッ学校行けば予備の制服ぐらいあるだろう、ほら走るぞ！」

「何故そんなに取り乱す？別におぬしが困る訳ではなかるう？」

「あーもう面倒だ！行くぞ！！」

「あっ」

そういつて俺は三咲の手を取り走り出す。

この先、楽しく過ごせるようにと密かに願ながら、走り出す……二人で……。

厳しいかな現実は…（前書き）

更新が不定期です…

厳しきかな現実は…

結論から言えば入学式は大惨事だった。

あの後、走ったにもかかわらず到着した時には既に式の開始寸前だった。

勿論、着替える時間などあるはずもなく、三咲は学ランの下にＴシャツという、新人生（しかも女子）にあるまじき出で立ちで式に望んだ。

そして、当の本人はというと、俺の隣で絶賛爆睡中だったりする。

「おい、起きろって、お前はただでさえ目立ってんのに入学式寝たりにしたら、先生方だの、ガラの悪い上級生だのに目ー付けられて大変だぞ？」

いや、もう手遅れだろうけどさ。

「五月蠅い、私は昨日深夜アニメをいやいや、早朝まで人助けの為に学園都市の外まで出かけてたんだ。」

コイツ寝ぼけて地が出たな…

「あーハイハイ、お前は某幻想殺しじゃないし、ここは学園都市でもねーよ、早く現実に戻って来い」

だから、こんな格好してたのかコイツ。

時間は進み、入学式終了後。

三咲とは別クラスになり、安心したのだ、アイツ一人で大丈夫か？等の思考をしていた後、何故か俺は職員室に呼び出されていた。いやまあ、理由は何となく分かるんだけどな。

「黒崎、奥谷の事なんだが」

ほらな、とか考えて思いの外冷静な俺。

「誰ですか？それ？」

しかし白を切る俺、面倒は御免だ。

「いや、お前奥谷の手引つ張って入って来ただろ」

「違います。人違いです。」

「教師に真顔で嘘を吐くな」

はあ、逃げられないか。

「すいません、でなんですか？」

「ああ奥谷の事なんだが正直言つて面倒見切れる自信がない」

オイ、教師。

「だからな、悪いんだがお前だけクラスを変えさせて貰った、大丈夫だ、入学式の最中見ていたがああの調子でやってくれるなら問題も無いだろう」

「はあ、別に予想はしてましたからいいですけど、教師としてそれはどうなんですか？」

「いや、俺もできる限りは手伝うからさ、これから一年よろしく頼むぜ」

どうやらこの教師、担任だったらしい。

狂おしき級友達

担任に連れられて教室に向かった俺。

【1-C】どうやらこれが俺が一年間所属するクラスらしい。突っ立っててもしょうがないので中に入る事にする。

ガラガラッ

扉の先に待っていたものは…

いや、無駄に間を空けておいて申し訳ないのだが、別になんて事無い（一人を除き）普通の教室だった。

「どうした【黒き者】我が僕に成りに参ったか？良き心構えだ我に尽くすがよい」

「黙れ、突っ込む気力も無い」

実質、コイツのせいでこのクラスにいるんだから、あながち間違っていないことに余計にイラつく。

「HRを始める、早く席に着け」

担任の声でクラスメート達が席につく、全員が席についた時に俺は

あることに気づいた。

「先生、俺の席がありません」

「まあそりゃ有るはず無いわな、とりあえず今日は奥谷の後ろに立っていてくれ」

はあ、だろうとは思ってたけどさ。

「絶対楽しんでるだろアンタ、それでも教師かよ？」

「あっはっはっはっ」

「笑ってんじゃねー!!」

「まあ黒崎は放っておいて、まずは自己紹介をしてもらっ、右端から順に立つて行ってくれ、じゃあ一番どうぞ」

コイツ、いつか絶対復讐してやる…

「新井 恵恋^{エレン}です。

趣味は読書と料理です、中学ではテニス部に所属していました、これから一年間よろしく願います」

どうやら一番は彼女らしい、しかし何だろうこの人は、別にどこかがおかしい訳ではないけれど、テンプレートというか、でも決して地味な訳では無く、しいていうならば、委員長といった表現が一番しっくりくるだろう、しかし漫画などである三つ編みメガネなどでは無く（現に彼女の髪型はカチューシャを付けて後はストレートである）なんというか雰囲気委員長なのだ。

「池田 悠太と悠輔です」

は？なんだ今の自己紹介は、彼をみる限り二人いるというわけではないようだし、なら何故二人分の名前を？

「実は僕達は二重人格者なんです、色々迷惑をかけてしまつかもし

れませんが仲良くしていただけたら嬉しいです、悠太でした。」

……… ということだこれは？とりあえず担任の方を見てみるがと
ても困った顔をしている。どうやら何も知らないらしい。

「じゃ、じゃあ次の人」

気を取り直して自己紹介を進める担任。

ガタツと音を立てて立ち上がる三咲。

コイツかよ…

「華京院・F・クロウディアだ」

担任からのアイコンタクトこれは！

「奥谷 三咲です」

通訳だな！どうやら正解だったらしく担任は安心したような表情を
していた。

「見ての通り私は選ばれし戦士であり、光闇の支配者だ」

通訳に構わず続ける三咲。

「ご覧の通り中二病患者であり痛々しい1女子高生です」

ムツとする三咲、どうやら通訳がお気に召さなかったらしい。「貴
様等は、私と同じ世界で生きて行く事を許された、我が導きの従僕
である、此より先私と共に歩むが良い」

「あなた達とは、偶然ですがクラスメートになることが出来ました、
これからよろしくお願いします」

くっ訳に無理があるか！？

しかし、誰からの声も上がることが無く、三咲は俺を睨みつけなが
ら着席した。

そう睨むなつて、あーでもしなきゃお前いきなりクラスで浮いてた
ぜ、と思っただがクラスメートの反応をみるにそうでもなかった
かもしれない、ほぼ無反応なのだ。

なんだこのクラス？大丈夫なのか？

「黒崎、次お前だ」
担任に言われ自己紹介を始める。

「どうも黒崎です」

「フルネームで名乗れ黒崎」

チツ駄目だったか。

「黒崎 詩^{シキ}綺です」

クソッ、ナチュラルに中二チックな自分の名前が恨めしい、日頃から三咲と居るせいで自分の名前を名乗ることすら恥ずかしく感じるとは、まったく鬱だ。

しかも、予想通りさつき三咲の自己紹介に少しでも反応を示した奴は俺の事を生暖かい目で見て来やがる。

「趣味は読書と映像鑑賞です」

嘘は言っていない。

「三咲の保護者みたいなものと思っていてください」
とりあえずそれだけ言って席に座る。

そのまま自己紹介は続く、自称暗殺者だの、超能力者だとか、キチガイがいた気がしたが、忘れたことに…

出来ねえ！なんだよこのクラス！三咲だけじゃないのかよ！むしろ三咲の方がマシな奴すら居るじゃねえか！どうりで三咲に反応示さねえわけだよ！！

担任なんてもう涙目じゃねえか。

いやむしろ狂ったクラスメート達

「田中 浩二だ、県外から来た」

ん、どうやら普通そうな奴じゃねえか。

「潰した族は数知れず人は俺を、不死の霸王と呼ぶ」

ハ！？今なんつったコイツ、節のハロー？（聞き間違い）何にせよコイツが変人であることに変わり無い、しかしコイツは他の変人達とは少し違った、言葉にすると難しいが言うなれば、他の変人達に真っ先に抱く感情は関わりたく無いだが、コイツの場合それが殴りたいなのだ、本当になんだコイツ？とりあえず後で殴っておこう。

「……………洞阿^{ホラア}…ブツブツ…」

どうやら次の人のようだ、って怖ッ！！なんだこの人！馬鹿みたいに長い真っ黒な髪のせいで顔がまるで見えない、なんか素でホラー映画の悪霊役とか出来そうだ、

しかもブツブツ言ってる下の名前聞き取れなかったし。

担任は俺の時とは違って名前を聞くようなことはしなかった、俺も俺で何故か名前を聞きたいとは思えなかった。
というか担任もう泣いてね？

どうやら、次の子で最後のようだ。

「K 中学校出身若松 桜です」

角だ……………なんていうか、角だった。

いや、普通に可愛い子だな〜とは思ったよでもな。

ナンカツノガハエテルンデスケド……………

今まで何故気づかなかったのか、彼女には角が生えていた。

これはもう担任号泣ものだろと思い担任を見てみるが、あれ？なんか無反応なんだが…

しかもあの顔は、もう精神が限界を迎えたとかではなく、単純に角

に気づいていない、いやむしろ見えてすらいなかった表情だ。
教室を見回してみると、数少ない常識人達も変人達も角は見えてないようだ。

あれひよつとして見えてんの俺だけ？

いやいや、そんな筈はない。

そんな俺だけ見えない物が見えるなんて変人チックなことがあるはずが無い、きつとあれだ今はやりのアクセサリーとかなんだきつとだからみんな普通に接してるんだきつと、そうだそうに違いない。

ピクッピクッ

………今…動いたよな、よく見れば見るほど接合部が自然過ぎるし、絶対生えてるよなアレ、ああなんかもうどうでも良くなってきた。

「〜です、一年間よろしくお願いします」

なんか、微妙な気分のまま自己紹介が終わってしまった。

「最後に担任である俺の自己紹介だ、それでもこの学校は一年目の新任教師だ、一年間よろしく頼む」

「待てや、人にフルネームで名乗らせといて自分は黙秘つてのは都合が良すぎるんじゃないか？」

「チッ」

今この担任、生徒に舌打ちしやがった！？

「神山 林檎だ、クソッ何だってこんな女の子の子した名前なんだよ！！」

と不機嫌そうに自らの名前に愚痴る１－Ｃ担任の”女”教師。

これから一年間俺はこのクラスでやって行くんだが、なんていうか
.....

鬱だ
...

いやむしろ狂ったクラスメート達（後書き）

この中の何人が出落ちキャラになるのだろうか…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2402k/>

邪気眼女の華麗なる日常

2010年10月8日13時28分発行